本棚

蔦谷栄一著

『日本農業のグランドデザイン』

生命優先の「変革力」への期待

本書の著者，蔦谷栄一さんの名前を，『農林金融』誌上で知るようになって，もうどれくらい経つだろうか。その都度，その時点で噴出中の問題を果敢に取り上げ，錯雑とした，厄介な根茎群を整序され，多面的に分析し，結末部分では，きちんと農協組織の取り組むべき重点事項を示して，また次の問題に掛かっていくという，大変なフットワークのよさと，小気味のいい文章のスピード感といったものに，私はいつも感嘆していた。

しかも，蔦谷さんの立つ現場は，国内にとどまらず，同様な問題を抱えているはずと思われる欧米にまで及び，「目線」の感覚でとらえた，簡明・率直なレポートも，併せて種々読むうちに，憧憬の気持ちもいくぶんかあってか，これは，なかなかの「快事」とまで思ったものである。

云えば，「素晴らしい出来事」の出現といったところだろうが，別面から言えば，そういう感覚の出所は一点一画にこだわり過ぎる，わが国の「農政論壇」の旧癖に対する，私の不満の裏返しだったかもしれない。

現在が，わが国の農業・農政にとって，大いなる過渡期であること，しかも，到底，悠長にはやっていけないことは，もはや誰彼なしに感じている。本書の著者はより先鋭的で，資源の枯渇や環境汚染で行き詰まりをみせる現代の産業社会と，その一角を占める農業，食品産業を，新しい価値観を組み込んで立て直すには，残された時間は少なく，「これからの数年間は･･･歴史的にもきわめて重要な時期」と見，強い切迫感をもっている。

日本農業のビジョン論を，全方位型でやることは，情報化の進んだ今日でも，やはり相当な難事である。共著にしたり，集団作業による提言・報告書が多くなるのも，そのためである。だが，本書の著者はあえてそういうルートはとらず，あくまで単独登攀（とうはん）を敢行したものが，本書である。間口を大きく取った分，分野によって原簿や精粗などの偏りができてしまうのはやむを得ないが，その代わり著者がどういう基本認識のもとに，どういう考え方，価値観をもって，この日本農業の変革に対処しようとしているかが，思索の道程とともに示され，将来ビジョンが，「グランドデザイン」として描出される。

著者の考え方，主張を，キーワードにまで凝縮させていえば，社会全体に，「生命」（いのち）を取り戻し，それを基底にすえて果実を得てゆく，となるのではないか。

末尾に，「現代は，農業だけでなく，すべての産業，領域で，そこにある生命を見詰め直し，生命を引き出していくことが切望されている時代である」という文章がある（傍点，評者）。

農業分野について，より端的には，生命重視の農法を軸にして，「持続的循環型」のコミュニティ（著者は，これを「地域社会農業」と呼ぶ）をつくり，それをネットワークで結んで，「田園都市国家」の形成に持っていくというのが，著者の基本モチーフである。

「田園都市国家」という言葉は，かつて

大平正芳内閣（1978年12月～80年７月）時に，首相ビジョンのひとつとして脚光を浴びたことがあるが，当時はまだ，いかにも金ピカ的であった。だが，21世紀の初頭にあっては，すでに何気なく人々が，その方向を志向している観さえある。

「生命重視」から「田園都市国家」に至る，基盤的分野の系譜については，説明にもう一工夫ほしかったが，「農業は社会を変革していく潜在力を有」している，という著者の思想こそ，本書を作り上げた本源的なものであろう。農業の「変革力」への期待が著者を動かしているわけである。

そういう考え方の由来を辿ると，その一つは，既存の農業への提言，主張の立論の基礎的な部分への疑問にある。最終的なビジョンについては，当面，大きな相違があるわけではないが，疑問の四点を評者の順序であげると，第一は，「農業は生命産業であること」が忘れられていること。農産物は生命（いのち）という，人間の力では如何ともしがたい要素を土台とするが，評者流にいえば，生命への畏敬（いけい）（シュバイツァー）の念の喪失だ。

第二は，農業・農地は公益性という非経済的価値を有するのに，農業を総合的な視点でとらえようとしていない。第三は，「自然」に全面的に立脚した産業である農業は，国・地域の気候・風土，地理的・地形的条件等によって，何よりも「適地適作」を土台とすべきなのに，それを無視してコスト等の比較がなされている。この点は，食料自給率を考える際の重要な尺度としても，著者は用いている。

もう一点，日本農業を論じるのに，明示的かどうかはともかく，米国農業を比較対照に想定していることが多いこと。歴史も自然条件も全く異なる日本農業について，そういう効率万能の一方的断罪は許されないという指摘であり，それが，「適地適作」とともに，本書の思想基盤の特徴の一つを成している。

「生命重視」から導出される著者のグランドデザイン（①地域資源，特に水田の畜産的活用，②環境保全型農業による取組み，③家畜福祉への配慮，④広域流通から地場流通重視，⑤直接支払いによる政策支援）の中では，やはり家畜福祉（Farm Animal Welfare）への配慮に著者らしさが横溢している。「家畜は単なる農産物ではなく，感受性のある生命存在（Sentient Being）」（アムステルダム条約による議定書）とされ，各国と市民は，その努力を求められている。BSE（牛海綿状脳症）の嵐を経て，家畜福祉に対する市民感覚に，わが国でも変化が生じつつあるように思われる。

最後に，多少飛躍して恐縮だが，評者も審査員の一人である，「農業ジャーナリスト賞」（農政ジャーナリストの会）に，今年（第20回），「ぼくは小さな田んぼのオーナーになった」という書き出しで始まる，カラー写真付きの連載記事（全27回）が，他の大作を押しのけて，受賞作の一つに選ばれた。題名も，「棚田日和―いね・ひと・いのち」で，掲載は，読売新聞の宮崎版，筆者は同宮崎支局日南通信部の内田正樹記者で，いままでの常識では全く考えられないケースである。

第二次大戦の惨禍が憲法９条を，わが国に定着させたように，「効率万能」の価値観も，徐々にほかの価値観と融合されていくのかも知れない。

――（社）農山漁村文化協会 2004年11月
2,800円（税込）266頁――

（内外食料経済研究会代表
山地　進・やまじすすむ**）**